

The background features a light blue gradient with a large, semi-circular green shape on the left side. Overlaid on the green shape are numerous horizontal stripes in alternating shades of light blue and white. Scattered across the blue background are several geometric shapes: solid blue pentagons, white-outlined pentagons, and white-outlined hexagons.

東京大学のサッカー

ライトブルーの 青春譜

はじめに

一般社団法人 東大LB会

理事長 浅見俊雄

東京大学ア式蹴球部が創部 90 年を迎えるに当たって、記念誌を作ろうということになった。東京高師からの明治以来の長い歴史を持つ筑波大を始め、早慶や京大など多くの大学でサッカー部史が作られているのに、東大は「闘魂」という部誌を 1963 年以来数年間隔で 5 巻刊行してはいたが、本格的に部の歴史をまとめて出版したことはなかった。

戦前の輝かしい歴史を築いてきた先輩たちはほとんど他界してしまったが、その人たちに直接薫陶を受けた戦後すぐの世代が元気なうちに、何とか部誌をまとめようということで、90 年という半端な年ではあったが、卒寿ということでもあるので、この事業を実行することになったのである。

編集委員会が作られ、その第 1 回の会合で、歴史の事実を記録することが最も重要だが、それだけではなく、その歴史に足跡を残してきた先輩たち、そしてこれからの歴史を作っていく現役たちに、エッセイというか、サッカーとのかかわりでのさまざまな思いや出来事を自由に書いてもらおうということになった。その結果、多くの方からの寄稿があり、歴史にまつわる記録や記事もかなりの量になったので、歴史を中心としたものと、エッセイなどを中心としたものの 2 冊を刊行することとなった次第である。

本のタイトルもいろいろな意見が出されたが、「闘魂」という部誌があり、またそれぞれの年代で闘魂を燃やし続けてきたということで、「闘魂 90 年の軌跡」がまず決まり、本誌のほうはかなり迷ったが、「ライトブルーの青春譜」となった。ライトブルーは東大のスクールカラーであり、OB会のLBもこのイニシャルを取ったものであるし、白の時代もあったが、多くの年代がこのカラーのユニフォームで戦っている。そして青春譜のほうは、寄稿された文章を読んで、もちろん学生時代サッカーに青春をかけたことを内容とするものも多かったが、70 歳を過ぎた先輩たち（私もその一人だが）を含めて、今でも多くのOBがボールを追いかけていることや、これまでの人生での生き方などを書かれている文章から、年齢に関係なく今も青春真っ盛りの中に生きていて、しかもサッカーが色濃くその生きざまに関わっていることが読み取れたことからの命名であった。

ところで、とっくに死語になって部の名前だけに残っていると思っていた「ア式」という言葉を、最近の部員たちはよく使っていることに気がついた。「私はア式です」というような言い方で、サッカー部員であることを表現するのである。ただサッカーをしているというと、同好会などと区別ができないので、こういうようである。私には、部に入って本気でサッカーをやっていることを誇らしげに表現するために「ア式」といっているようにも思えるのである。こうした表現の中に、伝統が受け継がれながらも、新しい歴史が作られていることを実感している。

ぜひ多くの方々にこの 2 冊の記念誌を読んでいただいて、サッカーそのものの魅力と、サッカーの魔力に引きずり込まれた人たちの生きざまなどから、特に 2 冊の共通のタイトルである「東京大学のサッカー」について何かを感じ取っていただければ幸いである。

最後になったが、本誌の刊行に当たってご支援ご協力いただいた方々に感謝申し上げて終りとしたい。

2008 年（平成 20 年）12 月

目 次

はじめに

第 1 部 大学のサッカーを考える 7

東大五月祭 公開パネル討論(基調講演再録)

「大学サッカーの未来を考える」 8

大学スポーツの移り変わり	浅見俊雄	8
ドイツの大学とスポーツ	加納樹里	10
アメリカの学校スポーツ	望月進司	12
日本の大学サッカー	瀧井敏郎	18

東大紛争とサッカー部

荒れ狂うキャンパスでサッカーを考えた 21

紛争の年にリーグ優勝	武田 厚	21
サッカー部第一の生活	手島直幸	21

御殿下サッカースクールを開校	浅見俊雄	22
部活動の意味を考える	手島・浅見・武田	22
グラウンドだけは穏やかだった	小菅恭彦	23
一時は活動に首を突っ込んだ	佐藤吉見	23
練習も試合も普段通りに	松岡誠也	24
東大紛争(または東大闘争)の経緯		25

大学のグラウンドに観客席を 26

御殿下ルネッサンス・プロジェクト	手島直幸	26
御殿下ルネッサンス・プロジェクトへ協力して大塚 隆		29
御殿下の今昔	中条一雄	30

第 2 部 私のサッカー人生 31

須賀敏孝さんインタビュー

戦中、戦後に闘魂を持ち続けて	32
----------------	----

岡野俊一郎さんインタビュー

自分で自分を強くする	38
------------	----

長山樹さん寄稿

蹴球からサッカーへ ボールと共に 70 年	48
-----------------------	----

第 3 部 世界の各地で 57

◆ワールドカップ◆

ワールドカップ 2002 の運営にみた

異文化との衝突	御園慎一郎	58
私はコレで会社を辞めました	広瀬一郎	62
WM 74 西ドイツ大会	小林邦彦	64
1986 年ワールドカップ・メキシコ大会	宮路康利	65

◆オリンピック◆

東京オリンピックに役員として参加	樋口周嘉	68
------------------	------	----

◆日本代表チーム◆

東大最後の日本代表？

ムルデカ大会マネージャー奮戦記	谷本篤信	70
杉山隆一氏のお言葉	大塚 隆	72
日本代表ヨーロッパ遠征をお手伝い	楠田喜宏	73

◆各国◆

サッカーの母国イングランド	井田 淳	75
外務公務員のサッカー体験	荒川吉彦	76
EXPO フットサル	本庄孝志	78

第 4 部 Jリーグの基礎を作る 81

住友金属蹴球団→鹿島アントラーズ

初の外人選手の確保で苦労	石田金次郎	82
--------------	-------	----

日産自動車サッカー部→横浜マリノス

素人監督、ドタバタ奮闘記！	安達二郎	85
---------------	------	----

東京ガス→F C 東京

公益企業からプロ・クラブへ	鳥原光憲	88
---------------	------	----

第5部 御殿下の青春

91

思い出で綴るサッカー部史

92

戦時中の蹴球部	渡辺隆二	92
戦中から蹴り続け超80歳に	三井忠夫	93
戦後の復活とリーグ優勝	高崎達也	94
戦後の蹴球日誌から	吉富 裕	97
旧制最後の蹴球部員	坪田亜規良	99
戦後の再建、寄付集めに苦労	折原一雄	101
水を飲むとはとんでもない	藤本鉄也	102
WMフォーメーションの時代	柴沼 晋	103
東大LBで天皇杯3位	小山富士夫	105
30年代はじめのボールとスパイク	嶋田武夫	106
懐かしいもの	大塚 隆	107
戦術、練習法、用具の革新期	平田攻	107
現役7年間に入れ替え戦4回	山本 修	110
ごめん！痛恨のシュートミス	中井 省	111
東大紛争当時の主務	小林喜一	113
御殿下クラブで海外遠征	小柳 望	114
4年時にリーグ優勝	田代康之	116
誇りと悔いが織りまざり	武田 厚	117
我がサッカー断章	吉崎英雄	121
農学部のお合宿所	宮路康利	122
けがを押して関東2部を死守	小野田莊平	123
女子マネ第1号	西山由美子	124
練習が厳しかった	牛窪(旧姓山川) 健一	126
東京都リーグで上位を維持	松行輝昌	127

我がサッカー人生

129

泥蹴会の応援団	堀井由美子	129
膝半月板損傷、外科医志望に転向	山崎隆志	130
北里大学水産学部での最終講義	渡辺 翼	132
東大の4年間で得たもの	石田金次郎	133
12歳から70歳半ばまで	山野一郎	135
御殿下クラブとLBでプレー	北川 薫	137
岡山でも夢を追いつづけ	新倉正和	138
70歳までは続けたい	金丸 仁	139
シニアサッカーで全国3連覇	植村祐幸	142
“SOI前期”にお手伝い	福田泰二	146

私とサッカー部

148

合宿で部員に合唱を指導	楠田喜宏	148
「閑話御免」	松村 保	148
東大のサッカーで鍛えられた	新井倏一	150
伊豆横断徒歩レースに挑戦	小柳 理	151
ゴールキーパーの楽しさ	永峰富一	153
下賀茂寮の思い出	鍋島 厚	153

山中湖寮の甘酸っぱい思い出	山田知良	154
リーグ優勝は大きな勲章	鹿島文行	154
サッカーのある人生	渡辺 宏	155
妥協しない強い意志を	黒澤秀樹	156
大学リーグへの憧れ	南谷尚志	156
なぜ、2部優勝、1部復帰、と言わないのか	池森俊文	156

追悼

168

追悼 五十嵐洋文くん(昭和32年度主将)	
木村 薊、小林昭夫、西野宏、浜口幸久	168
追悼 ヘコさん、陽 雅文くん(昭和51年卒業)	
田中 靖	169
追悼 中西義和さん(平成10年度コーチ)	
下田修平	172
追悼 手塚耕治くん(平成元年度主務)	
同期を結びつける永遠の絆	住谷安史 174

現役

176

1部昇格のシナリオ描いて	大沢拓巳	176
なぜサッカーを続けるのか	小園健太	178
失敗を経て部生活を続ける	齋藤 信	179
『翼』	鈴木亮平	180
サッカーと私	高橋信行	181
サッカーへの姿勢	高松 敏	182
部を理解し好きになって	千布勇氣	183
悔いなくやろう	中川 隆	185
わがチームは恵まれている	中島悠司	185
あっという間の2年間	中野 誠	186
「仲間」	那須雄介	187
部生活を通じて人間的に成長	西 健吾	188
主務として思うこと	船本洋平	189
90周年に際しての決意	水澤仁雅	190
恵まれた環境に幸せを感じ	南 哲	191
私の誇り	木本宏美	192
ア式蹴球部からの贈り物	野呂順子	192
欧州選手権の予想	熱海修平	194
自伝	岩田宗一郎	196
自分が望む道を進むということ	後藤遷也	197
調子がいい日はボールもいい	高木駿平	198
僕とKとフランス	深田啓介	199
心技体の心	藤安雄治	200
闘魂	南田遼太	202
「ア式」の本気度と緊張感	村上達哉	203
これはいつか自分が読む原稿	望月進司	204
私のサッカー人生	吉田航太郎	205

私にとってのア式蹴球部	小林由佳	206	継続は力なり	太田圭亮	224
私がここ（ア式）にいる理由	櫻井優里	208	生きている実感	加賀田俊将	226
部活	辻目佑子	209	自分にとってサッカーとは	久保雅史	226
持ち続けていたいこと	半田奈緒子	210	僕とサッカー	鈴木康平	227
マネージャーと付き合うのはありかなしか	江連 豪	211	サッカーをするということ	道喜開視	228
麻布サッカー部とア式の主観的違い	大内三千生	212	私とサッカー	野中尚輝	229
私とサッカー	久木田紳吾	213	一つの分岐点	蒔田祐貴	230
自分とサッカーとの関わりについて	佐藤裕人	216	サッカーから学んだこと	松本一起	230
「ア式」の東京制覇	白井英介	217	得点の快感、あのかっぱえびせん中毒	三浦良介	232
自分の目標と部の目標達成を願う	藤井丈生	219	苦楽を共にする仲間と勝利を味わいたい	宮川啓輝	233
このままでは終われない	松谷康平	220	人生サッカー	森元規裕	233
19 歳	小蒲彩子	221	東大ア式蹴球部に入学して	石川 蘭	234
サポートの側に回ってみて	高木美帆	222	部活動とは	市来麻友子	235
成長すること	藤村美穂	223	東京大学ア式蹴球部に入って	溝端一美	236
日々、前進	丸井由貴	224			

東京大学のサッカー「闘魂 90 年の軌跡」 東京大学ア式蹴球部 90 年記念誌 目次 238

現役部員のエッセーに出てくる特殊用語、学生用語・略語
編集後記

第1部 大学のサッカーを考える



東大五月祭 公開パネル討論（基調講演再録）

「大学サッカーの未来を考える」

日時：2008年5月24日（土） 午前10時～12時

場所：東京大学本郷キャンパス 法文2号館1大教室

パネリスト：

望月進司（東大法学部3年生、サッカー部員、米国Arcadia高校卒業）

加納樹里（中央大学教授、ケルン・スポーツ大学に2年間留学）

瀧井敏郎（東京学芸大学教授、サッカー部部長）

浅見俊雄（東大LB会理事長、東大名誉教授）＝司会＝

主催：東京大学ア式蹴球部（サッカー部）

協力：有限責任中間法人 東大LB会



左から加納、望月、瀧井、浅見の皆さん

大学スポーツの移り変わり

浅見俊雄（東大LB会理事長）

みなさん、おはようございます。本日司会を務めさせていただきます浅見と申します。これより東大ア式蹴球部と東大LB会による東大サッカー部創部90年を記念してのパネルを開催したいと思います。今年で90年というのは、大正7年、1918年に「帝大蹴球団」という名前で正式に試合を行った記録を起源としております。現在東大のサッカー史を制作中なのですが、そのような中で過去の歴史を振り返るだけでなく、大学サッカーの将来についても提言して現役の励みにもなるようにしたいということで、五月祭という絶好の機会にこのような企画を立てました。

大学チームは90年で10倍に

関東大学リーグは1924年に12校2部制で始まったのですが、2008年のプログラムを見ますと関東大学リーグが2部制で24校、その下の関東地区の都、県リーグには、合わせて113校、合計137校が参加していて、いまでは10倍以上

に増えています。社会全体も変化をしていますし、大学の数自体も増えていて、大学自体がエリート教育の場から一般的な基礎教育を学ぶ場所に変化し、しかも大学全入時代を迎えるにあたって、大学もそのあり方を変えざるを得ない状況にあり、地域社会への貢献も期待されています。

スポーツの世界ではトップはアマチュアからプロフェッショナルへと変化していき、日本のサッカーに関していえばJリーグの設立、日韓ワールドカップの開催と大きな変化がありました。

そういった中で、基礎的な情報として大学サッカーはどのように変化してきたかを、はじめにお話したいと思います。

体育系大学の台頭

まず関東大学で優勝したチームの変遷を見てみましょう。中大OBの高橋清介氏は、歴代の強かったチームによる時代区分をしています。旧制大学時代の1924年～52年は早稲田、慶応、東大

の3強時代、新制になってからの1953年～79年は早稲田一強の時代、そして1980年から現在までが筑波大学や国士舘大などが強い体育系大学の時代としています。

それを象徴するかのように、現在関東リーグの1部、2部に参加している24校中の14校が、体育、スポーツ関連の学部、学科を持っていて、スポーツ選手を迎え入れています。こんなに多いとは思っていませんでしたので、調べてみてびっくりしました。

このように大学が変化をしている中、東京大学がどのような歴史をたどっていったかといいますと、旧制時代は関東大学リーグ1部でしたが、1957年に2部に落ちて、最近は東京都リーグの1部から3部を行き来してしまっていて、現在は2部におり、もう少しで1部に上がれるかといったところで活動しております。

大学出身選手の割合

JFA（日本サッカー協会）の選手登録数を見てもみると、高校やクラブユースから大学に入学するのですが、高校で150,000人以上いた選手が大学では17,646人になってしまっていて、いろいろな条件の違いはあると思いますが、高校で一生懸命やっていた連中が大学では1割程度しかやっていないという現状が見て取れます。また大学サッカー部員の前歴を関東大学1部の12校について



浅見俊雄さん

プログラムから拾ってみたのですが、360人中255人（70.8%）が高校サッカー出身で、94人（26.1%）がクラブユース出身、その他が11人（3.1%）となっていて、70%が高校サッカー出身という構成になっています。

表1は日本代表選手のうち、大学サッカー出身選手の割合を示したのですが、ベルリン・オリンピック（1936年）では12人が大学現役生で卒業生が4人。メルボルン・オリンピック（1956年）でも大学出身選手が主流でしたが初めて高校出身の選手が入ってきました。東京オリンピック（1964年）、ロサンゼルス・オリンピック（予選・1984年）でもまだ大学出身選手の割合が多かったのですが、ロスのころに初めてクラブユース出身の選手（津並・松木）が代表に入ってきました。

Jリーグ設立以降、1998年のフランス・ワールド

表1 日本代表選手の出身別構成

大会	年	人数	大学卒	大学現役	高校卒	ユース	その他
ベルリン O	36	16	4	12			
メルボルン O	56	16	9	6	1		
東京 O	64	19	10	6	3		
メキシコ O	68	18	16		2		
ロス O (予)	84	22	16	1	3	2	
フランス WC	98	22	11		10		1
日韓 WC	02	23	3		15	5	
ドイツ WC	06	23	2		16	5	
AFC C	07	22	5		10	7	

ドカップでは、大学出と高校出の割合が半数ずつくらいになり、日韓、ドイツのワールドカップでは高校とクラブユース出身選手の割合が大学出身選手の割合を大幅に上回りました。しかし最近の資料では大学出身選手の人数が少し増えています。

Jリーグでの大学出身選手の割合の推移(表2)でも、年ごとに少なくなってきた大学出身選

手の人数が少し戻りつつあります。以上が大学サッカーの変遷と現状です。

ここにあげました基礎的なデータを元にして、これから大学サッカーの未来、役割などについて3人の方にお話しいただきます。

では最初に中央大学教授の加納樹里先生お願いします。

表2 Jリーグ 試合エントリー選手の大学サッカー部OBの比率

年	93	94	95	96	97	98	99	00	01	02	03	04	05	06	07	08
%	24	36	35	36	32	29	33	31	29	27	26	26	26	27	26	31

ドイツの大学とスポーツ

加納樹里 (中央大学教授)

始めまして。ご紹介いただきました加納樹里でございます。私は幼いころからサッカーをやりたいとしかたなかったのですが、私が若いころにはサッカーは女子のスポーツではありませんでした。サッカーボールを持っていると弟のものと間違えられました。現在は自分で趣味と実益を兼ねてサッカーのチームを持って遊んでいますけれども、日本協会の選手証を持ったのが45歳の時でした。サッカー界ではアウトサイダーですので、パネル討論のトップバッターとしては特にサッカーに限定せず、大学の運動部のあり方を考え、またドイツのスポーツ活動について紹介したいと思います。そして最後に、簡単に私の大学スポー

ツについての提言をお話させていただければと思います。

ドイツのスポーツ活動母体

ドイツで企業に勤めていた時にストレスもたまって、なんとかアフターファイブにスポーツの機会を作りたいということで、まず訪れたのが、Volkshochschule(市民大学)の「シチズンハイスクール市民公開講座」です。ここでは語学講座やスポーツの場を提供していました。そこで活動しているうちにデュッセルドルフのアゴンでバスケットボールクラブに入って、そこでドイツのスポーツクラブというのを初めて体験しました。

その後、1987年から89年までケルン体育大学に留学していました。体育大学でも「するスポーツの母体」はあくまで地域のSportsverein(スポーツクラブ)ですので、私も皆さんご存知のFCケルンに、10キロぐらい離れたところでしたが足繁く通っていました。

大学の内部でスポーツが出来るところがないわけではありません。Hochschulsport(教職員を含む大学所属者全員を対象とした同好会)がありま



加納樹里さん

したが、日本の早慶戦やイギリスのオックスフォード対ケンブリッジのような盛り上がりとは、まったく無縁な雰囲気でした。少し古い話ですが基本はいまでも変わっていません。

少し新しいところでは、2003年に旧東ドイツのライプチヒ大学スポーツ科学部に行っていました。ここでは、最近日本の大学でも行われ始めていますが、大学と地域とが連係して、授業終了後の大学を開放して、成人対象の健康スポーツや、リハビリ、旧東ドイツ時代から力を入れていた体操クラブなどの活動をしています。

この大学の授業は朝の7時40分から始まるので、真っ暗な中を学校に通うような感じなのですが、始まりが早い分午後3時過ぎくらいになると学生もいなくなって、大学は閑古鳥が鳴いたようにガラーンとしてきます。そして午後4時、5時過ぎくらいに学外の人達が入ってきます。ドイツの夏は9時過ぎくらいまで明るいので、長くアフター5の時間を取ることができ、そこで長い時間活動することができました。

文武両道の問題

以上私がドイツで接してきたスポーツ活動の話をさせていただきました。

これまでドイツのスポーツ指導者に接する機会があった中で、ドイツと日本の違いについての一つのポイントとして、文武両道ということがあげられると思います。今日、会場に来ていらっしゃる方は東大OB、東大生が多いということです。文武両道については、とても切実に感じいらっしゃるのではないのでしょうか。

今の大学ではスポーツを一生懸命やると勉強は出来ないと、はなから文武両道をあきらめているような学生が多いようです。

体育会の運営は本来OG、OB主体で運営されてきたので閉鎖的でしたが、大学全入時代を迎えて運動部の価値を大学が見直して、運動部は「経営資源」とみなされるようになりました。大学のブランドを担う存在として、メディア露出度の高

いトップスポーツへの集中があります。実際、箱根駅伝は視聴率が20%超で広告料金に換算すると19億5000万円あるともいわれています（広告効果という視点では100億円を超えるという話もある）。

ということになると、大学は本来「受け入れて、育て、送り出す」という役割だったのに、これからは、大学に貢献しうる人材（選手）の取り合いが始まって、分捕り合戦、使い捨てが始まるのではないのでしょうか。「大学に入ること自体が目的化している」ことが多いので、使い捨てにされてもいいから、大学に入るためにスポーツを続けているという高校生がいるという話もあります。サッカーのようなメジャースポーツではなくてもそういう話があるくらいです。

スポーツ推薦はフェアか

中央大学では、大学のOB、OGを通じて、学業成績が3.0から3.5くらいで、スポーツでいい成績をあげている者をセレクトしているので、門戸は非常に狭いです。スポーツ推薦の問題点は、やむをえないことですが、現時点での成績のみを考慮して伸びしろを見ないことです。また、個人の能力が高くてもチームが上位にいないとセレクションに引っかけられないなどの問題点があるので、フェアで有意義かといえば疑問が残るかと思います。中央大学では年間1000人の入学者から2、3人は、磨けば光る原石を持った者が入学してきます。

本学の出身者で現在日本代表の中心となりつつある中村憲剛は、学生時代から目に付いていました。というのも、体育会所属の学生は、たいてい体育会仲間と一緒にジャージ姿で一番後ろの席に座るのが当たり前なのに、一番前に座っていて一般学生と行動を共にしていたからです。彼の両親に面会した時には、ご両親が「とにかくこいつは絞って下さい」と話していました。

体育会で「いい選手」を育てるには

運動部は内部の結束は固いけれど、そのノウハ

ウは外に出ません。体育会の各部は、もっと横の繋がりを持つべきだと思います。

また、大学当局は、運動部が大学のメリットに貢献していることをしっかり認めて、もっとお金を出すべきです。これまでの各運動部の運営は、手弁当中心でしたが、これからは自助努力だけに頼らない仕組みや制度を作るべきだと思います。

また、大学運動部を地域に還元する制度を作るべきかと思います。先に中村憲剛の例を出しましたが、体育会の選手も普通の大学生なのですから、

もっと体育会以外の学生とも交流を持つべきだと考えます。

浅見 ありがとうございます。では次に、アメリカで生まれて高校までアメリカで育ち、また子どもの時からサッカーをプレーしていて、東大に入学してサッカー部に所属している法学部3年生の望月進司君から、アメリカの大学サッカーのことを中心に話していただきます。

アメリカの学校スポーツ

望月進司（東大サッカー部員、米国 Arcadia 高校卒業）

（最初に英語で自己紹介したあと）

今日は日本語でがんばります。先程ご紹介していただいた通り、僕はロサンゼルスで生まれて、小・中・高とずっと現地の学校に通い、アメリカの大学受験もしてUCバークレー大学に1年間一応在学した後、帰国子女受験で本学に入学しました。高校までずっとサッカーをしていました。米国の大学スポーツには参加していないのですが、小さいころから大学のアメフトの試合を見たり友達と大学スポーツについて話をしたり、高校生の時には地元のUCサンタバーバラが出場した大学選手権の決勝を見に行ったりと、僕自身が参加していなくても大学スポーツに肌で触れていたとい

うことで、これからアメリカの大学スポーツについてご紹介させていただきたいと思います。

NCAAという組織

大学スポーツを全米規模で管理統括しているNCAA (National Collegiate Athletic Association) はインディアナポリスに本部があり、予算が年間56.4億ドル（約5,640億円）、職員が350人という巨大な組織です。これとは別に、NAIAという例えばボクシングというWBA、WBCのように完全に独立した組織がありますが、NCAAがパワー、規模ともはるかに大きいので、今回はNCAAについてのみ説明します。

現在、東京大学サッカー部は、東京都大学リーグ2部に所属していて、その上には1部があって、そのさらに上には関東大学リーグ（1部、2部）があります。そしてそれは関東だけで終結したサッカーのみのリーグなのですが、NCAAは横の繋がりがとても強く36のすべての競技を全米規模で管理統括しています。NCAAには現在1部から3部（Division 1～Division 3）の、各々が400校ずつ、合計1,200校が加盟しています。

競技会の行われ方ですが、リーグ戦を約20試



望月進司さん

合くらい、1シーズン約2ヵ月半で行います。シーズンオフは練習にあて、シーズン中は試合と調整のみという、ほとんどプロに近いスケジュールとなります。

リーグは伝統と地域性に則って組織されており、約10校で組んでいるリーグが全米で40リーグほどあります。その中に、優勝すれば決勝トーナメントに進むことが出来るという指定をNCAAから受けたリーグが22あります。そのほか強いリーグの2位、3位や、特別強かったチームなど26校がNCAAによる審査(RPI: Ratings Percentage Index)で選抜されます。合計48チームが全米で行われる決勝トーナメントの出場権を得ることが出来ます。

メジャー (な) リーグ?

メジャーなリーグと表題を付けましたが、アメリカでの大学スポーツの規模を考えますとそのようにいえるのではないのでしょうか。先程も申し上げましたが、1,200校が加盟し、36種目を統括している全米の大学スポーツリーグは、すべての競技で全米規模の戦いが行われます。競技レベルを示すピラミッド(パフォーマンスピラミッド)では、高校とプロの間にしっかりと大学スポーツが入り、全米ではプロの次にメジャーなリーグで、プロスポーツへの大きな供給源といえると思います。その点は日本と事情が違います。日本では、例えばサッカーではJリーグの下には大学ではなく、高校やJユースが並列で並んで位置しているのではないのでしょうか。

もうひとつのメジャーな理由はその人気です。アメリカのアンケート会社の調査による「あなたの好きなスポーツは何ですか」という質問には、1位にNFL(プロフットボール)(30%)、2位にMLB(プロ野球)(15%)があがり、ここまでは皆さんの予想通りかと思いますが、3位にはプロホッケーやプロバスケットをおさえて、大学アメフト(11%)がランクインしています。4位にはカーレース、そして5位にまた大学バスケットがランクインしています。



公開パネル討論フロア全景

視聴率についてのデータは入手出来なかったのですが、この順位がテレビの視聴率とほぼ同じと考えると差し支えないと思います。実際大学アメフトの決勝はNBAの決勝やひょっとするとNHLの決勝より視聴率を取るのではないかといえるくらいの一大会イベントです。大学バスケットに関して、48チームで戦う決勝大会のすべてが民放で放映されます。

私が住んでいたロサンゼルス地域ではUCLAが非常に強く、毎年その時期のゴールデンタイムはUCLAの試合が放映され、テレビコマーシャルが流れます。

もうひとつ「プロスポーツと大学スポーツ、どちらをより好みますか?」という質問でもプロ73%に対して、大学スポーツも12%の支持がありました。これはどちらを応援しますか、どちらの中継のテレビを見ますか、という質問だと思っていたらいいと思います。これはアメリカのメジャースポーツ誌「Sports Illustrated」に掲載されていた質問なのですが、そのような雑誌にこのような質問が掲載されること自体、大学スポーツへの関心の高さがうかがえます。

大学スポーツビジネスはプロ?

先程視聴率の話をしました、それだけ視聴率を見込めるので、大学のアメフトやバスケットなどのスポーツのテレビ放映権は、すでにCBSやスポーツ専門チャンネルESPNで契約されています。

また、今回調べていて驚いたのですが、各大学にはオンラインショップがありまして、チケット販売やグッズ販売を行っています。オンラインショップの運営は大学と契約した専門の会社が行っていて、その売り上げの何割かが大学の収益になり、大学スポーツの運営資金になっています。グッズはTシャツやポスター、応援用の旗、ユニフォームを着たデディーベアといったものから、シーズン通した試合のDVD、チームロゴの入った紙皿やバスタオルやベッドカバーなどが売られています。

かなり大勢の人が購入しています。これは、単純に日本の大学スポーツとアメリカの大学スポーツの違いだけの問題ではないかもしれませんが、アメリカにはカレッジカルチャー、カレッジファッションというものがあります。

日本には大学のロゴの入ったものを身に着けている人はいませんが、アメリカでは自分の大学のTシャツを着ている学生は大勢いますし、高校生でも好きな大学のTシャツを着ている人がたくさんいました。繁華街を歩いていてもスポーツ強豪校のTシャツやトレーナーを着ている人を大勢見かけます。東京大学を歩いてもUCCLAのTシャツを着ている人に会えるくらい、アメリカの大学ファッションは世界中に広まっているので、たくさんのグッズがあって、それだけ売り上げが見込まれるのです。

次に進む前にここで2つの質問をしたいと思います。

アメリカの運動部に所属している選手は受験をしているのか、スカウトなのか。

彼らが貰っているお金は奨学金なのか、年俸なのか。

“ステューデントアスリート” ……

もはや、プロ？

ここから少しずつリーグ全体から選手1人1人についてのミクロな視点に移って行きたいと思います。

“Student Athlete”というのは学生選手のことです、そのような言葉がアメリカにはきちんと存在しています。

“Student Athlete”の大学受験制度についてですが、アメリカの大学受験制度は高校4年生の秋ごろ（注：高校は4年制で、新学期は9月に始まる）、10月から12月に願書を提出するのが一般的ですが、運動部受験の場合はそれでは遅すぎまして、1、2年次から遅くても3年次にはスポーツでの実績と学業成績に関する書類を志望大学に提出します。

大学側はその書類をもとにスカウト視察を行います。ですので、4年次に書類を提出してはスカウトが来てくれない可能性があるわけです。

スカウトの目に留まると、入学前に大学と「大学に合格した暁には4年間運動部に在籍します」という契約を結びます。入部者のほとんどが奨学金をもらいます。奨学金を渡すには運動部への入部が条件ですので、そのための契約になります。そして、大学受験に無事合格して大学生と運動部員になります。

どうしてこのようなことが可能かといいますと、アメリカの大学受験がそもそも入学試験ではなく、審査によるAO受験だからです。大学に合格するには、学校の学業成績や全国統一テストの成績で合格点を満たしていると同時に、勉強以外の活動、例えばNGOなどの活動実績や、サークル活動、全米サイエンスオリンピックへの参加など、課外活動で実績を残さないとはいけません。運動に秀でている生徒にとってはスポーツが課外活動での実績となります。大学の入学枠としては一般の学生と同じ枠になるのですが、先に話した通り運動部の学生は奨学金が発生するため入学前に大学との契約が結ばれます。

文武両道について

先程、加納さんが文武両道についてお話しされていましたが、私がアメリカで在籍していた高校には、私の友人で飛びぬけた文武両道の生徒がいました。サッカーのオリンピック代表候補に選ば

れて遠征などでたびたび学校を抜けたり、カリフォルニア州の選抜チームにも選ばれたりしました。陸上部にも所属していて800メートルと1600メートルでリーグチャンピオンになりました。しかも、全校生徒4000人の学校だったのですが、高校を次席で卒業しました。まさしく文武両道だと思います。アメリカではそのような文武両道の生徒がたくさんいます。

東京大学にも、高校時代スポーツで優秀な成績を修めていた人がいるとは思いますが、少ないと思います。どうしてアメリカではこのようなことが出来るのかといえば、先程お話した大学の入学方法に日本との違いがあるからだと思います。日本では文武両道という言葉はありながらも、それを評価し育む土壌がありません。例えば日本で大学に入学するにはスポーツで入学するか、勉強で入学するかのどちらかになりますが、アメリカでは学業とそれ以外の活動の両方が揃って初めて入学許可が下りるので、課外活動がスポーツでの実績である運動系の学生は、「文武両道」でなければ大学には入学できないからです。

大学による管理と支援

次に大学に入学した後の“Student Athlete”の生活について、NCAAの1、2部に所属する運動部員のための「Student Athlete Handbook 2007-2008」（学生選手用案内）を参照して、ワシントン大学の例を説明いたします。まずアメリカの大学の運動部は“部”というより“チーム”といった方が合っている気がします。というのも、部員数が平均で30人程度しかいないからです。新入部員は卒業や引退などで戦力外になった人の補充要員でしかありません。ですから即戦力になる最小限度の人数だけしかスカウトしませんし、契約書には1年生からチームに貢献出来るかどうかの確認が記載されています。

次にトレーニングについてですが、これが本当に自由の国かと思うほどすべてが大学に管理されており、すべての練習はコーチ、監督の監視下で、NCAAで規定されているシーズン中週20時間、



フロアからの質問

オフシーズン週8時間という活動時間内の練習をします。この時間が厳密に守られているかといえればそれは微妙なところですが、このような規定があります。

自主練習も禁止で、練習をしたい場合は、監督、コーチの許可を得て大学のトレーナーの監視下で行われます。また、個人持ちの練習着、ドリンク、サプリメントも禁止です。まるで軍隊のような徹底した大学からの管理は、大学が奨学金を出している以上100%大学のために貢献してもらうことへの対応といえます。また、練習環境ですが専用のグラウンドやジムがあり、Equipment Staff（用具係）もいますので、ユニフォームの洗濯などは全くする必要がありません。

次に学生選手のための勉強面に関する支援についてお話ししたいと思います。アメリカの大学には学業面の支援のためのSAAS（Student Athlete Academic Services）という部署がありまして、そこが入学時に授業選択の指導や、教授と学生とのパイプ役、遠征時の授業のノート取りや補習、専属チューター（家庭教師）の斡旋など、学業面での選手の状況把握と指導を行います。また、このような恵まれたプロのような環境の中でも、プロアスリートになれるのは250人中1人といった世界なので、選手達の就職活動の支援もします。

学生選手には授業に関する数々の特権もありまして、遠征時の授業の出席免除、試験の追試、成績評価方法の変更、たとえば点数合格を及落合格に変更するといったようなことが行われます。各

学期始めには授業の優先的登録などの特権もあります。また、選手専用の自習棟がありまして、そこにはパソコン付自習室や常勤の専属チューター、遠征時のノートパソコンの貸し出しなどを行っています、このように「部活動も大変だけれども勉強もがんばってくれよ」というような手厚い支援環境が整っています。

なぜこのように手厚いサポートがあるかといいますと、大学スポーツがあまりにもメジャーであるため大学にとっての広告効果が非常に高いからです。だから運動部への支援に力を注いでいますし、文武両道をうたっている以上それを達成させるために支援を行うのではないかと思います。

次にお金の話です。先程お話ししたグッズ販売な

どの収益で運営費を賄えますので、部費を払うことはありません。選手がもらえる奨学金は高校生時代の成績によって金額に違いがありますが、もし授業料、生活費、教科書代などのすべてに奨学金を貰えたとすれば、最大12万ドル(およそ1,200万円)にもなり、それはもはや年俵といえるのではないかと思います。

日本の大学サッカーは強い

先程パフォーマンスピラミッドについてお話ししましたが、アメリカではプロの下に大学スポーツが入るのですが、2008年5月28日に行われたイングランド戦の、サッカーのアメリカA代表のメンバーを見ると、22人中14人が大学サッ

表3 アメリカA代表(5月28日:イングランド代表戦メンバー)選手の所属歴

選手名	選手の所属歴
Adu, Freddy	* IMG Soccer Academy — MLS
Beasley, DaMarcus	IMG Soccer Academy — MLS
Bocanegra, Carlos	UCLA (大学) — MLS
Bradley, Michael	IMG Soccer Academy — MLS
Califf, Dan	University of Maryland (大学) — MLS
Cervi, Dominic	U. of Tulsa (大学) — MLS
Cherundolo, Steve	U. of Portland (大学) — Germany
Clark, Ricardo	Furman U. (大学) — MLS
DeMerit, Jay	U. of Illinois (大学) — England
Dempsey, Clint	Furman U. (大学) — MLS
Donovan, Landon	IMG Soccer Academy — Germany
Feilhaber, Benny	UCLA (大学) (途中入部) — Germany
Guzan, Brad	U. of South Carolina (大学) — MLS
Howard, Tim	高校 — MLS
Jaqua, Nate	U. of Portland (大学) — MLS
Johnson, Eddie	IMG Soccer Academy — MLS
Lewis, Eddie	UCLA (大学) — MLS
Onyewu, Oguchi	IMG Soccer Academy — Clemson University (大学) — MLS
Orozco, Michael	不明 — Mexico
Pearce, Heath	U. of Portland (大学) — Denmark
Spector, Jonathan	IMG Soccer Academy — MLS
Wolff, Josh	U. of South Carolina (大学) — MLS

* IMG Soccer Academy = アメリカサッカー協会が運営する全寮制・私立のサッカー選手養成学校。1999年設立。U-16とU-17の2チームで活動している。

カーを経験しています(表3)。その次にIMG(アメリカサッカー協会が運営する全寮制の私立のサッカー選手養成学校、U-16、U-17の2チームで活動)の出身者が多く、高校から代表選手になったのはたった1人です。面白いと思ったのがIMGから大学サッカーを経験して代表になっている選手がいて、大学サッカーのレベルはIMGの次のステップになり得る程のレベルであるということが、うかがい知れます。

一方、日本のA代表の構成を見てみると、大学サッカー出身者は4人、高校サッカー出身者は16人、Jユース出身者が5人といった構成になっていまして、大学からプロという進路が非常に少ないといえます。

では、このように代表選手を多く輩出するアメリカの大学サッカーは強いのかといいますと、ユニバーシアードの優勝国は日本の4回が最多で、アメリカはまだ1回も優勝していません(表4)。

これには非常に戸惑ったのですが(笑)、要するに日本の大学サッカーは強いんです(笑)。ただ日本では大学によるレベルの差が非常にあります。また、夏はアメリカの大学のサッカーはオフシーズンなので、主な選手はMLS(プロサッカー)の2部でプレーしているので、ユニバーシアードには出ていないという可能性もあります。

僕個人としては日本の大学サッカーは、未来をそう悲観する必要はないのではないかと思います。受験制度の違いもありますが、高校1、2年から願書を出さなければ大学で運動部に入ることが出来ないといったアメリカの制度では、僕のレベルでは大学でサッカーをやることは出来ません。日本では、大学に入ってから高校の部活の延長のようなサッカーが出来ます。これには非常に魅力を感じていますし、スポーツ推薦を取っている学校とそうではない学校が試合で真剣に戦うことの出来る環境にも魅力を感じています。

日本の大学サッカーに何が足りないかと考えると、ファンの関心、メディアの露出です。メディアの関心が直接大学サッカーとは関係のないところにあるのではないかと思います。社会全体とし

表4 ユニバーシアード歴代大会結果

年	優勝国	準優勝国
1979	メキシコ	ウルグアイ
81		
83		
85	北朝鮮	ウルグアイ
87	ソビエト連邦	韓国
89		
91	韓国	オランダ
93	チェコ	韓国
95	日本	韓国
97	イタリア	韓国
99	スペイン	イタリア
2001	日本	ウクライナ
03	日本	イタリア
05	日本	イタリア
07	ウクライナ	イタリア

優勝回数：日本4(最多) アメリカ0

て大学サッカーを支援する姿勢、大学スポーツを支援する姿勢が必要なのではないかと思います。大学スポーツを支援する土壌が形成されない限り、こういったことは解決出来ないのではないかと思います。裏を返せば支援する組織などが作られれば、大学スポーツはもっと発展するのではないかと思います。

浅見 1つ質問したいのだけれども、アメリカではサッカーは大学スポーツの中ではどのような位置にあるのですか。

望月 アメリカの大学では、アメフトや、バスケット、野球がメジャーなのですが、サッカーも上位に位置しています。

浅見 ありがとうございます。では最後に東京芸大学の瀧井敏郎教授のお話を伺います。

日本の大学サッカー

瀧井敏郎（東京学芸大学教授）

こんにちは、瀧井です。東京大学ア式蹴球部90周年おめでとうございます。このような節目の時に呼ばれて大変嬉しく思います。また、今望月君から「日本の大学サッカーは強いんだ」といわれてすごく嬉しいような、戸惑うような感じです（笑）。

私は1997年にユニバーシアードの監督を務めたことと、現在は大学サッカーの技術委員という立場から大学サッカーの現状とこれからについて話していきたいと思います。

スポーツマインドを持つ人材を社会に

戦前や戦後の大学サッカーについては先程浅見先生からお話がありましたが、かつては代表選手のほとんどを大学生が占めるといった感じでしたが、だんだん大学出身者が減少し、1993年のJリーグ発足後には大学サッカー不要論等もいわれるようになりまして、大学サッカーはその使命を終えたかのようにいわれていました。

我々は「いやそうではない！」ということで、1995年に福岡で開催されたユニバーシアードでは大学関係者のすべての力を結集して優勝し、大学サッカーの存在感を示しました。この時のユニバーシアード代表はユース代表を経験しているものが大勢いました。



瀧井敏郎さん

97年、99年大会の敗退を機に『将来構想委員会』を設立し、これから大学サッカーをどのようにしていくのかということを真剣に話し合い目標設定をしました。

その中では選手に世界基準を体験させるといった選手の強化策についての話も出ましたが、大学サッカーだけの視点ではなく、大学全体の戦略の1つとして大学スポーツを発展させていくためにはどのようにしたらいいのかといったことについて議論しました。

結論をはじめにいいますと、大学のスポーツ環境を良くしていくのには制度を変えなくてはなりません。そのためにはスポーツマインドを持った人材を日本の政財界に送り込むことが大切となり、大学スポーツはそのような人材を社会に送り込むことが使命で、我々の大きな仕事だということです。

それを基に改革を進め始め、その後ユニバーシアードでは2001、03、05年と3連覇を果たしました。2001年は監督として、後の2年間は技術委員長として、どのようなことをしてきたかについて話をしていきたいと思います。

大学サッカーの強化策

全日本大学サッカー連盟のチャレンジ、大学サッカーの実績作りとしてユニバーシアードの3連覇を果たしました。また、特別強化指定選手制度を設けて、大学生がJリーグのゲームに出場出来るようにし、その出場実績は卒業後Jリーグと契約する際の実績として認められるようにしました。また、世界基準を体験させて世界へチャレンジするために、年2回のヨーロッパ遠征を組み、2008年にはオランダに遠征に行きました。その陰にはスポンサーになってくれた株式会社デンソーの協力があります。

先程日本の大学サッカーは強いのかとのお話が

ありましたが、現地での感触はマンチェスターユナイテッドやパリサンジェルマンのユースチーム(U-22)などと対等に戦えました。ただし、南米のプロで、もう後のない心構えのボカジュニアズのユースのようなチームにはやられてしまいます。

ユース世代の有名な国際大会であるトゥーロン国際大会に出場した時には、他の国からはプロの登竜門であるユースチームが来る中で、日本はアマチュアの大学チームが行ったので、大会会長に「日本のサッカーの組織はどうなっているのだ」と驚かれ、説明するのに苦労しました。親から仕送りを貰って毎日ボールを蹴っているのは日本だけですね(笑)。

このように改革を進めてきましたが、2002年の資料によりますと、大学サッカー選手は13,053名登録があるうち、プロ契約が出来たのはJ1が14人、J2が17人の31人で、わずか(0.24%)に過ぎません。

大学選手に教えたこと

では、そのような中で何を彼らに教えてきたかといえば、自分達で考えることと、よく見て考えながら動くことの出来る力を向上させることに重きを置いて、オープンマインドで他の選手といろいろなことを話し合いながら指導してきました。

彼等に個の力がないとはいいいませんが、個人でできること以上のことをペアやチームで発揮出来るような選手になって欲しいと考えていました。つまり自分がどこのチームでも何をするべきかの状況判断する能力を身に付けて、Jや代表で活躍する選手になって欲しいと考えていました。オシムが羽生や巻を登用したのは、そのようなチームでどのように動いたら有効かという判断力を持っていたことによるものだったと思います。

そのような目標を持った中で、常に映像や音楽を大いに活用してメンタルトレーニングなどもやっていきました。「攻撃していくぞ」という気持ちを持たせるために自分達の得点シーンを集めた映像を見せ、同時にいつも同じ音楽を聴かせて、



フロアからの発言

試合当日は映像がなくても音楽を聴けば同じように攻撃的な気持ちにすぐなるようなトレーニングをしました。こういうことは、Jリーグ以上のレベルでやってきたと自負しています。

強化の成果でしょうか、最近のJ選手の出身内訳は、高校、大学、クラブユースが大体同じ割合の3分の1ずつになっています。

大学サッカーの強化には大学地域リーグの活性化が必要だと思います。これはもっとサッカーを楽しむ人達が増えて欲しいという思いからです。

また、部員が200人、300人もいるスポーツ校などでは、レギュラー以外の試合に出られない人が大勢いることになるので、その人達をそのままにしておいてはもったいないということで、Independence League(すべての選手に公式試合を!)を立ち上げました。

大学の社会貢献

先にお話しました通り、大学も社会の変化に伴って改革をしなくてはいけない時代に入っている中で、国立大学といえども地域社会への貢献が必要とされています、そして、Jリーグも地域に愛されなければいけません。このように同じ目的を持っている中で、我が国初の産・学・公連携による「学芸大クラブ」を設立しました。

このほかFA(協会)のコーチライセンスを取得した学生による近隣の住民向けのサッカースクールや、指導者養成講座などが出来ないかと考

えています。マンチェスターユナイテッドがやっていることを参考にした案です。具体的には、J1でもなかなか育成費用をかけられないU-15、U-18の年代の育成を、大学と関係を組むことにより地域に広げていくことを考えています。大学とJリーグのクラブと地域が関係することによって、いろいろな可能性が広がるのではないかと考えています。

浅見 ありがとうございます。

3人とも内容のたくさんあるある話をしてくださったので、時間がだいぶ超過してしまいました。

司会者として最後のまとめをしなければならないのですが、次のプログラムもあって教室を空けなければなりません。私がへたなまとめをするより、今日の話を参考にして、ドイツともアメリカとも異なる日本の環境の中で、大学スポーツ、大学サッカーをどう発展させていくべきなのかを、それぞれがお考えいただければ、そして実践していただければと思います。

パネリストとご参加くださった方にお礼とお願いを、この会を閉じたいと思います。

本当にありがとうございました。

パネリストのプロフィール

瀧井敏郎（たきい・としろう）

国立の東京学芸大学のサッカー部を、独自の考え方で育て、関東大学リーグの一部に昇格させた。藤枝東高校、東京教育大学体育学部卒業、筑波大学大学院修士課程（コーチ学専攻）修了。

ユース日本代表、日本B代表選手。全日本大学選抜コーチやU-23日本代表アシスタントコーチ等をつとめたあと、2001東アジア競技大会日本代表、2001ユニバーシアード大会の日本代表監督をつとめて優勝した。その後、全日本大学サッカー連盟技術委員長として大学サッカーの強化および改革に取り組んだ。

現在 東京学芸大学教授、日本サッカー協会理事、同規律・フェアプレー委員会委員長。

加納樹里（かのう・きさと）（旧姓：山口）

ドイツと日本でサッカーを体験した。

ドイツ・ケルン体育大学にロータリー財団奨学生として2年間留学、サッカー選手のキャリアは、ほとんどなかったが、ドイツで公認コーチのライセンスを取得、クラブのB.C.Efferenに在籍した。帰国後日本女子体育大学サッカー部監督、現在中大サッカー部顧問。大学院時代に習志野S.C.L.に所属。現在、自分の女子チームを持っている。上智大学文学部独文学科卒業、順天堂大学大学院体育学研究科修士課程修了（スポーツ医学専攻）。

現在 中央大学文学部教授、日本フットボール学会理事。

望月進司（もちつき・しんじ）

東京大学法学部3年生 ア式蹴球部員。

米国に生まれ育ち、米国のスポーツを体験したのち、東大に進学した。カリフォルニア州ロサンゼルス近郊で、小学校1年のときにサッカーを始めた。小、中学校ではAYSOと地元の日本人サッカークラブL.A. Hawksでプレー。高校では、地元の公立高校、Arcadia High Schoolのサッカー部、および競泳部、水球部でも活動した。

AYSO (American Youth Soccer Organization) は全米規模の地域型サッカー・プログラムで野球のリトル・リーグのようなもの。L.A. Hawksは地域の日本人コミュニティのサッカー・チーム。ロサンゼルスには、同じようなチームが6つあった。

浅見俊雄（あさみ・としお）＝司会＝

東大が関東大学1部だったころに選手として活躍、その後、監督もつとめた。

県立浦和高で国体と高校選手権で優勝。東大1年生で1952年度第1回全国大学選手権に出場して優勝。協会では、ユース代表監督、国際審判員など多方面で活動した。

東京大学教育学部卒業。東京大学教授、Jリーグ勤務、日本体育大学教授、国立スポーツ科学センター・センター長を歴任、中央教育審議会委員、日本サッカー協会理事、審判委員会委員長、アジアサッカー連盟審判委員会副委員長等をつとめた。

現在 有限責任中間法人東大LB会理事、アジアサッカー連盟規律委員会副委員長、東京大学名誉教授 日本体育大学名誉教授。

東大紛争とサッカー部

荒れ狂うキャンパスでサッカーを考えた

1968年代から1970年代にかけては、世界的に大学キャンパスで闘争が荒れ狂った時代だった。東大では昭和44年1月に安田講堂攻防戦があり、春の入試は中止となった。全学を巻き込んだこの紛争のために、学生、教員はさまざまな対応を迫られた。

他大学では、運動部が大学当局側に利用された例もあったが、そのなかで東大のサッカー部は、どのように対応したのだろうか？

練習やリーグ戦への影響、入試中止による部員構成の変化などはどうだったか。当時の監督、主将、部員に語ってもらった。

(記録：岡田滋行 昭和49年卒業)

紛争の年にリーグ優勝

武田 厚 (昭和44年度主将)

昭和41年に入学した当初は、学生運動はそれほど広がってはいなかった。医学部の医局に看板が立っていたりしたが、サッカー部の生活は淡々と進んだ。43年1月の医学部のストあたりから、激しくなり、法学部にも飛び火した。駒場(教養学部時代)のクラスの友人が活動家になったりした。社会の矛盾や権力の不正を追求しようという意気込みには共感したが、体系的ではなかったように感じて積極的には加わらなかった。授業もほとんどなくなったので、図書館とグラウンドに通い、リーグ戦を目指してもっぱら練習した。

秋のリーグ戦が終わって次年度のキャプテンになった。部員は30人くらいだった。

部員は明らかに、全共闘、民青、ノンボリの三種類に分かれ、目つきも違っていた。年越しに御殿下に部員を集めた。集まるかどうか心配だったが、全員来たのでほっとした。

それぞれが一言を持っていたので、部活動を

やるかどうかの意思確認をした。途中の議論の記憶はないが、結論として、サッカー部の部員として活動するからには、サッカーの一点に絞ろうということで一致できた。前年に上の部との入れ替え戦に出られなかったので、入れ替え戦出場を目標に結束した。

まあ、練習では、3～4人でパス回しをやり、グループに分かれたり、ある人間にはパスを出さないというようなことはあった。気持ちで整理しても、どこか引っかかるものがあるということだ。入試中止で1年生が入ってこなかったので人数は減ったが、よく言えば少数精鋭で、この年に限ってみれば結束力が強く、個々が強いメンバーに恵まれ、リーグ優勝することができた。

サッカー部第一の生活

手島直幸 (昭和43年入学)

入学した年には、医学部が既にストに入っていて、入学式の会場にピケが張られて中に入れないというような状況だった。4、5月は授業があっ

たが、駒場もだんだんときな臭くなってきて6月にはクラス討論が始まった。

「大学に入ったらサッカーをやろう」と思っていたので、サッカー部第一の生活だった。「政治はとにかく……」といった感じだった。京大戦もあったし、夏の合宿にも行った。1年生の大半は授業がなかったが、大学には行き、いっぱい出ているピラを見たり、学生会館で討論をしたりしていた。

44年の入試が中止になったことは、その後のサッカー部に大きな影響を与えたと思う。リーグ優勝したのは、上妻、黒沢、俵などのフォワードに下の学年の精鋭がおり、武田、吉崎、小柳さんなど4年生の強いバックがいたからだ。

御殿下サッカースクールを開校

浅見俊雄（教員、監督）

昭和42年の春に名古屋大学から戻ってきて、教養学部教授会の学生担当の委員をやった。「お前は学生に顔を知られていないから伝令に行け」などと言われて、駒場の寮や本郷に出かけていった。学生には、ハネ上がるな、怪我だけはするな、暴力はやめろ、ということをやっていた。

1年間待ってもらって、43年に監督になったが、週に3日は練習に行き、「グラウンドに来たらサッカーのことを考えろ」と、指導していた。東大紛争と呼ぶか東大闘争と呼ぶかわいり、議論もあろうが、こっち（教員側）もある意味で闘っていた。

大学とは何だろうと考えさせられたし、大学は何をすところかと学生に突きつけられた。あのとき、サッカーがなければどうなっていたかと思う。我々には、サッカーがあり、グラウンドがあるということで、44年から東大のグラウンドを一般に開放する趣旨もあって「御殿下サッカースクール」を作り、子供たちを教え始めた。これも学園紛争の、ある種の副産物だと思う。学生は、

喜んで手伝ってくれた。

思い出としては、44年の夏ころだと思うが、練習が終わったあと、武田主将が「さあ、皆、空を見ようよ」と上を向いたことを覚えている。本当にきれいな空で、なかなか面白いことをいうキャプテンだなと思った。

部活動の意味を考える

〔入試中止の影響〕

手島 合宿所で生活していた当時、冗談半分に、「1年虫けら、2年奴隷、3年人間、4年神様」など言っていたが（笑）、入試中止のために、虫けらの最下級生を2年間やった。練習前には、当時の土のグラウンドをならし、ラインを引き、ネットを張り、ボールに空気を入れるということをやられた。ただ、3、4年生も当たり前のように、そうした作業をやってくれた。

戦力的にも、一年下の学年がないというのは、サッカー部に大きな影響を与えたと思う。3年生になって、ようやく後輩が入って来たが、戦力の底上げを図るため、我々が4年生を食わなければならないという雰囲気はあった。個人的には留年したかったが、紛争の後、教授がやさしくなって、簡単に単位をくれるようになり、それはかなわなかった。

浅見 確かに、入試中止で1学年が欠けたというのはサッカー部にとっては痛手だった。当時の下級生が手間のかからない少数精鋭ばかりで、それは良かったのだが……。紛争自体の影響ということで言えば、野球部なども「無風」で、ヨット、ボートなども合宿所にこもり、概ね、好成績を残している。ただ、サッカー部は、その後は、苦しかった。いろいろな意味で、後遺症は10年くらい続いたのではないだろうか。

〔生き方は違っても〕

武田 現役のころはサッカーに集中していた。

仲間同士でサッカーについて知的レベルの高い会話をしていた。そういう時間は使った。今は、人数も違うし、装備も違うし、女子のマネージャーもいる。だが、今のチームが、どれくらいサッカーを語り合う時間を使っているのか、疑問に思う。確かに、サッカー部のメール・マガジンで詳しい試合内容などが送られてくるが、仲間同士で会話をしているのだろうか。一つの組織として皆で向かって行っているのだろうか。目的についてのコンセンサスが欠けているのではないか。リーグ戦の試合を見ていて、「もっと落ち着いてやればいいのにな」と思うことがある。

手島 紛争の中で、本当の学問とは何か、何を学ば良いかなどを考えたが、結局、現場でやるしかないと思った。授業も少なかったが、印象に残った教授の話などから、経営コンサルタントとして現場でやろうと思って今の職業を選択した。現役の皆さんには、人間の多様な生き方の中にサッカーを位置づけて欲しい。好き勝手にやっている中のひとつにサッカーがある、いろいろな経験をしながらサッカーをやる、そういう雰囲気は今はない。それなりにはやっているだろうけれども、対人スポーツ、チームプレーの面で、人間との付き合い方をどうしたら良いのか考えて欲しい。

浅見 何で東大に入ってア式蹴球部でやっているのかを考えて欲しい。遊びとしてやるのなら、部に拘束されないで同好会でやれば良い。あのころは「何で俺はここでサッカーをやっているのか」皆が考えた。今はそれがあんまりないのではないかな。自分たちの立っている位置みたいなものをもう少し考えて欲しい。私自身、教員としてそうした問題を突き付けられ、闘いの結果、その後の生き方には財産になった。

サッカー部の仲間は同志なんだけど違う。サッカーをやるということでは一致しているけれども、生き方は違うということだった。そうしたことを通して、サッカーに取り組む姿勢、勝ちに行く姿勢が変わって行くのではないかな。

グラウンドだけは 穏やかだった

小菅恭彦（昭和45年卒業）

昭和43年、44年の2年にわたり大学全体を巻き込んだ紛争であり、45年卒業の私たちの年次は本郷キャンパスでの生活の全てが東大紛争の最中にあった。本郷ではまともな講義を受けた記憶がほとんどないのが実情である（東京短期大学卒業と自称せざるを得ない）。サッカー部員も皆それぞれの思いに則って濃淡はあるにせよ東大紛争（闘争）に参画、日和見でいる訳にはいかない時代であった。

サッカー部においても本格的な活動家、各派のシンパなど紛争に対する対応は四分五裂だったと思う。部員同士の殴り合いが起こっても不思議のない時代だった。信念に従い大学を中退した仲間もいた。

紛争ピーク時にキャプテンを勤めた1年先輩の藪内さん、同期の武田両氏の苦労は大変なものであったと思う。ただ、両キャプテンの人徳に加え、やはりスポーツの不可思議な力なのか、各人が殺伐とした大学構内からいったん御殿下グラウンドに集まると、ここだけは不思議なくらい静謐で平和な世界であった。スポーツマンシップを痛感する場面であったように思う。

一時は活動に首を突っ込んだ

佐藤吉見（昭和45年卒業）

私が3年生（1968年）の時、練習試合で朝鮮大に勝ち、早大とは引き分けるほどチームは好調だった。自分自身でも、60分以上戦わされた朝鮮大の後半をしのぎ切り、早大戦ではマークした松永をなんとか抑えることができ、リーグ戦に大いに期待を抱いた。しかし、リーグ戦は、出だしこそ順調だったものの尻すぼみの戦績に終わるこ

とになってしまった。4年生になる来年こそはという気持ちでオフを迎えることになったと記憶している。

その間に大学は、いつ全学バリケード封鎖や機動隊突入があるかわからないような状況に陥っていた。自分でも当事者意識の低さに恥ずかしくなり、元はと言えば健全な大学あつてのサッカーではないかと整理をつけて、活動に首を突っ込んでいくことにした。正月明け、正門の門扉の外から機動隊に囲まれた安田講堂を眺めた。やはりこういうことになるしかなかったのかと暗澹^{あんたん}たる気持ちになり、留年せずに早く社会人になろうという思いだけが残し、サッカーはズルズルと休部状態になってしまった。

4年生になって連休も過ぎたころ、3年生の期末試験が大過なく終わり、就職も目処がついたところで、このまま学生生活を終わらせるのではつまらないという思いが強くなってきた。燃焼し切るにはサッカーしかないと思い立ち、恥ずかしながら復部を申し出た。最初の練習は惨めにもスローモーションのようにしか身体が動かず、皆に笑われたが、嘲笑ではなく爆笑であったことを嬉しく覚えている。

リーグ優勝で勇躍臨んだ入れ替え戦であったが、後半出場の機会を与えられた私の股間を中大のゴールが抜けていった。確か4点目だったと思う。その瞬間、私のサッカー人生、学生生活が終わったと感じた。

ほろ苦くはあるが、達成感を与えてくれたことを東大サッカー部員と浅見監督（当時）とに心から感謝したい。

練習も試合も普段通りに

松岡誠也（昭和44年卒業）

我々昭和44年卒業組が4年生であった昭和43年（1968年）は東大闘争の年でもあった。

東大闘争は医学部が発端で、昭和43年の1月

に登録医制度導入をめぐり医学部が無期限ストに突入した。医学部の問題が全学に広がったのは3月で、28日に医学部の全学闘争委員会は卒業式の実力阻止を図ったため、大学側は卒業式を中止せざるを得なかった。

6月には医学部全闘委が安田講堂を占拠したが、大学側が機動隊の出動を要請したため、学生側は自主的に退去した。しかしその後すぐ警官導入に抗議して法学部を除く9学部が一斉に1日ストを行った。60年安保以来のできごとである。

その後、7月には安田講堂が学生側に占拠され、バリケードで封鎖された。このころから各学部が無期限ストに入り、10月には法学部がこれに加わり、開校以来初の10学部全部が無期限ストという事態になった。事態が解決したのは年が明けてからで、翌昭和44年1月18日に機動隊による安田講堂の封鎖解除がはじまり、19日には占拠していた学生全員が排除された。これら一連の騒動の影響で昭和44年の入試試験は中止となり、その年の新入生はいなくなった。

当時のサッカー部の練習は現在と同じく御殿下グラウンドで行われていたが、医学部の問題であった時期も、全学部がストに入った後もグラウンドの使用は可能で、練習も普段通りに行われた。

中止となった卒業式当日も、御殿下グラウンドでは練習試合が行われたし、秋のリーグ戦も御殿下グラウンドで通常通り行われた。

部員の間には、サッカー部の練習と東大闘争とは別問題という暗黙の認識があり、医学部問題およびその後の大学改革の問題に対する立場がどうであろうと、全員が練習には参加していた。

ただし、練習以外の時間には、それぞれが自分の考えに基づいて行動したようである。積極的にデモや大学側に対する抗議行動に参加したものもいれば、無関心でいた部員もいた。その意味では、東大闘争は当時のサッカー部の活動に影響はなかった。

無期限ストの影響で一部の部員は3月ではなく5月に卒業し、大学院進学や就職といったサッカー以外の面では影響があったが……。

むしろ入学試験が中止になったためにその年の新入部員がいないということが、その後の部の活動に影響を与えたと思われる。

東大紛争（または東大闘争）の経緯

1968年(昭和43年)

- 1月29日 医学部学生が登録医制度に反対して無期限ストに突入
- 3月12日 医学部が医局長告発事件で学生17名の処分発表(2名誤認の可能性)
- 3月28日 医学部全闘委が卒業式実力阻止を図ったため、大学側が卒業式を中止
- 6月15日 医学部全闘委が安田講堂を占拠
- 6月17日 大河内総長の要請で機動隊が出動、学生は退去
- 6月20日 警官導入に抗議して法学部を除く9学部が一日スト
- 6月26日 文学部が無期限ストに突入
- 6月28日 安田講堂で「総長会見」、学生5000人が参加
- 7月2日 新左翼系が安田講堂をバリケード封鎖
- 7月5日 東大全共闘(山本義隆議長)結成、教養学部も無期限ストに突入
- 7月24日 東大助手共闘会議結成
- 8月10日 大学側最終案として「8・10告示」発表、一方的な告示形式に学生が反発
- 8月28日 全共闘が医学部本館を占拠
- 9月16日 本郷の5学部で学生大会・学部大会開催
- 10月12日 法学部も無期限ストに突入し、10学部が無期限スト
- 11月1日 総長・全学部長辞任(総長代行に加藤法学部長)
- 11月12日 林文学部長が文学部大衆団交から173時間ぶりに開放、緊急入院
- 11月14日 法学部学生大会で全学封鎖反対決議
- 11月22日 全共闘による全学バリケード封鎖の強行挫折
- 12月29日 文部省が翌年度の入試中止を発表

1969年(昭和44年)

- 1月9日 加藤総長の要請で機動隊が大学構内に入る
- 1月10日 秩父宮ラグビー場で大学側と7学部代表団との集会
- 1月16日 加藤総長が機動隊にバリケード撤去を要請
- 1月18日～19日 安田講堂攻防戦
- 1月20日 大学側が入試中止を受け入れる

大学のグラウンドに観客席を

東京大学本郷キャンパスの御殿下グラウンドは、創設のころから東大ア式蹴球部のホーム・グラウンドだった。長い間、スライディング・タックルをすればひどい擦り傷のできる砂礫のフィールドだったが、現在は快適な人工芝になっている。土のグラウンドのころから、サッカーの全国大会や大学リーグの公式戦の会場としても使われてきている。

しかし、土曜、日曜は更衣室を使うこともできず、観客のためのスタンドもない。

米国や南米の大学には、数万人を収容する大スタジアムを持っているところも多い。東大のグラウンドも、せめてビジターのチームと熱心に応援してくれる人たちに失礼にならない程度に改修できないものだろうか。



上は昭和40年代、下は平成20年の御殿下グラウンド

御殿下ルネッサンス・プロジェクト

手島直幸（昭和47年卒業）

GRPの具体的提案

2007年正月、東大LB会の新年度事業計画を検討する場で、御殿下グラウンドの現状を改善するプロジェクトを提案し、その実現をはかることが、LB会の事業計画の1つとして認められた。御殿下グラウンドの往年の姿をよみがえらせることを期して、御殿下ルネッサンス・プロジェクト（GOTENSHITA Renaissance Project：GRP）と名付けた。

私の提案に賛同して建築家の大塚隆（昭和44年卒業）が、図面を書いてくれることになった。御殿下グラウンドのレセプション機能を高め、付加価値の向上を目指して、観戦施設、更衣室、シャワー、トイレ等の付帯設備の具体的改善案を作成した。

2007年3月にLB会理事の小山富士夫（昭和35年卒業）、大塚、手島の3人で、この改善提案を東京大学学生部および学士会にプレゼンテーションした。好意的に受け止められたが、学内の建築物について議論されていた時期で本提案は優先順位を確保できず実現には向かわなかった。

さらに2007年5月には、大学主催の「東大130周年 知のプロムナード」のベンチデザイン・コンペに、大塚が「山上御殿 どこでもベンチ」で応募した。御殿下グラウンドの付帯施設充実をからめ手から攻める一手であったが惜しくも落選した。

プレゼンテーションのときの資料とともに、中条一雄（昭和28年卒業）の御殿下グラウンドについての記事と、GRPの具体案をまとめた大塚隆の記事を掲載する。この取組みの経緯を公表し、関心を高めることにより、GRPチームの目指した御殿下スタジアム構想がいつの日か実現することを願っている。

御殿下グラウンドの変遷

御殿下グラウンドは東京大学の顔である。明治時代には「三四郎」に描かれるように秋の大運動会が開かれ、大正時代から昭和にかけてのア式蹴球部全盛時には全日本選手権等大きな大会の会場として使われた歴史がある。昭和40年代、関東大学リーグの試合も御殿下グラウンドで行われ、学内外の観客が山の上に鈴なりになって観戦していた。つまりスタジアムとして機能していた。

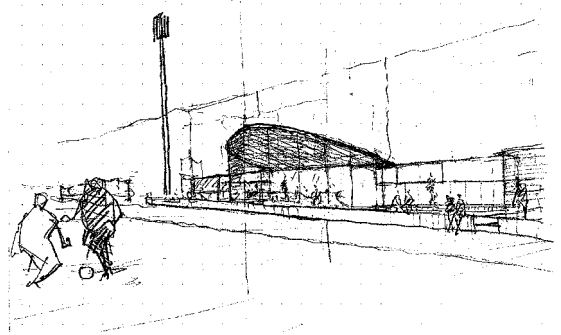
昭和50年代になって大学100周年記念事業として御殿下記念館が地下に建設され、御殿下グラウンドが変容した。地上のグラウンドはコンクリートに人工芝を貼り付けたものとなりサッカーの公式戦ができる条件でなくなった。山は削られ天然の観客席は失われた。地下にあった部室は取り壊され、サッカー部は農学部グラウンドに本拠地を移した。

5年前に、農学部グラウンドがキャンパス計画により使えなくなる事態になり、東大サッカー部のホームグラウンドは、また御殿下グラウンドに戻るようになった。FIFA公認の人工芝に張り替えられ、サッカーの公式試合も行えるようになり、現在に至っている。

御殿下グラウンドの現状と課題

サッカー部室は農学部グラウンド脇にあり、部員はそこを更衣所として自転車で練習場である御殿下グラウンドに通っている。グラウンド脇の倉庫を使わず、ボールや TENT などの用具を部室で保管するため自転車で運搬している。学生に現状について尋ねると、入学時以来の所与条件であるが故か、練習しているときに大きな不満はないという。

アメリカン・フットボール部、ラクロス部および一般学生・職員は、平日地下の御殿下記念館の施設を利用できることから、グラウンドに近接し



た更衣室やシャワーがないことに、さほどの不便は感じていないようである。

ただし、昔の御殿下グラウンドがスタジアムとして機能していたことを考えると、現在の御殿下グラウンドには問題がある。

サッカー部の場合、練習以外に学外チームとの試合も多く組まれている。秋には東京都大学リーグのリーグ戦が開催されている。また、ホーム・カミングデーのときなどに学外の人を招いた試合が行われることもある。網の外から立ち見の観衆には不満だらけの「スタジアム」である。

また、学外からの相手チームに対しては、はなはだ失礼な「スタジアム」である。グラウンド管理者である学生課不在の平日夜間および土曜、日曜には、地下の記念館施設が使えないため、学外チームはグラウンド脇の屋外で更衣している。試合が終わってもシャワーなしで帰っている。

つまり、現在の御殿下グラウンドには、観客のいる対外試合をする場合のレセプション機能（観客席、更衣室、シャワー、トイレ等の付帯設備）が欠如している。

御殿下グラウンドの価値

御殿下グラウンドの価値はどこにあるのか。以下の3点にまとめた。

- ① 都心にある貴重なサッカーグラウンドである。その立地の利便性から、学内関係者の利用に止まらず、学内外の人が集うスタジアムとしての潜在価値が大きい。
- ② 東京大学の施設マスタープランによれば歴

がシルエットとなって、透明感もあり、病院側からグラウンドの状況、気配を感じられる。

プラン A より、面積にして 10m² ほど小さくなるが、構造が格段に簡易になる。

③「知のプロムナード」のベンチデザイン

御殿下ルネッサンスの提案のほかに、2007 年 5 月、大塚に「東大知のプロムナード」のベンチデザイン・コンペに応募してもらった。

このコンペは、東大創立 130 周年を記念して大学が主催したもので、「東京大学アクション・プラン」に掲げられている。「本郷」、「駒場」、「柏」、「白金」の各地区キャンパスのプロムナード周辺にモニュメントおよびベンチを設置し、学生や教職員がくつろげる語らいの空間を設けるためのものである。誇るべき歴史や研究成果を活用したストーリー性をもつ「知のプロムナード」として位置づけている。キャンパスの中で人が留まり、その場所を楽しめるきっかけとなるような〈ベンチ〉を各所に設置する予定であり、広く大学の構成員にそのデザイン案を募るという趣旨であった。

大塚隆は、「山上御殿 どこでもベンチ」と名づける案で応募した。

これは、病院とは反対側の、山上会館側の斜面にユニークなベンチを置き、憩いの場とするとともにサッカーの観戦にも役立てるというアイデアだったが、残念ながら当選しなかった。(スケッチ参照)

以上のようなしだいで、御殿下グラウンドの伝統を生かし、社会に役立つものとしたいという計画は進展していない。

しかし、大学が社会に開かれた「学びの拠点」として新しい道を求めていくにあたって、スポーツも重要な役割を担うべきであり「大学のスタジアム」構想は、十分、検討に値するものだと思う。

御殿下ルネッサンス・プロジェクトへ協力して

大塚 隆（昭和 44 年卒業）

往時の御殿下グラウンドの賑わいを復活したいとの相談を L B 会理事手島氏より受けたのは 2007 年 2 月半ばであった。ピッチは整備されたが、更衣室やシャワーなどの不備、観戦スペースの欠如は、招待チームや応援者に対して恐い。都心の貴重なグラウンドだけに潜在する付加価値向上を含めて大学に働きかけ、L B 会の支援のもとでぜひ実現したいので、素案を練ってほしいとのこと。クラブハウスも、観客席も……と夢は膨らんでいる様子ながら、すぐ絵がほしいと。期間は 1 週間もなく、クライアントの典型のような依頼であった。

かつての更衣室はグラウンド下にあったが、現在は全学の体育施設がある。幅長 4m を切り、照明塔の間の 40m の細長い部分だけである。そこに、地下に 2 チーム分の更衣ロッカー室、シャワー室、WC、グラウンドレベルに観戦スペース、及び試合の際は本部として使える Cafe を設置するという欲張った案を作り、わがままなクライアントの要望がほぼ生かせたと思う。素案をもとに大学当局に相談し、今後の段取りなど良い感触を得たとは思うのだが、その後の大学側の体制変動などの事情もあってか、目下は宙に浮いているらしい。

もし基本条件を検討する機会があるならば、本来応援や観戦の席は山上御殿側にあるのが自然だろう。かつては傾斜地を利用して試合観戦ができ、鈴なりの応援団で盛り上がっていた。現在はグラウンドとの間に通路ができ、フェンスで囲まれ、内外の一体感、臨場感が失われてしまったのは残念なことである。大学当局に聞けば、夜間などの管理上の諸トラブルもあって、フェンスの必要性は理解できるものの、正直なところは何とかならんものかと思う。皆さんの知恵とアイデアが期待される場所である。

そんな雑談の折、手島氏が、今度はキャンパス内の「知のプロムナード」なるコンペがあるので応募しろと言ってきた。創立130周年を記念して、キャンパス内の選定されたスポットにベンチを配し、憩いと語らいの空間の連鎖を作ろうという計画。「たががくベンチ」、されどくベンチ」となかなか気をひくタイトルである。本郷では山上御殿脇の傾斜地がその候補地のひとつにあがっている。但し、今度は実質1日しかない。

普通のベンチを置くのではあの場所にそぐわない。斜面に沿って段々状の舞台のような木の床を植栽でカムフラージュしようと即断。

落差40cmの木のデッキを、奥行き1mと2mで階段状にし、平面的にはややずらして、あまりスタジアムのような印象を感じないようにする。軽い椅子を持ってくるのもよし、円座するのも寝転ぶのもよし、自由な憩いのあり方を提案した。名づけて「どこでもベンチ」。審査員には受けなかったようである。やはり通常の腰掛以上は期待されなかった。

この二つの作業は、休みを取って作成するほど個人的には楽しませていただいた。これを機に御殿下グラウンドの具体的な付帯施設、観戦のあり方、支援の手法が議論されることを期待したい。それが、わがクライアントの本音ではなかろうか。

御殿下の今昔

中条一雄（昭和28年卒業）

東京・本郷の東大病院横の「御殿下グラウンド」に特別な感慨をいだく中年以上のサッカーファンは多いのではないか。かつては旧制高校のインターハイや関東大学リーグ戦などが、ここで頻繁

に行われた。

病院の反対側の小高い丘の草むらが、天然の観覧席になっていた。足を滑らして転ぶ人が必ずいたが、常連の観客は斜面の複雑な地形の起伏を心得ており、気に入った草むらの傾斜を選んで体のバランスをとりながら観戦した。大きな試合になると、病院の窓にたくさん顔が並んだ。

土のグラウンドは固くてデコボコで、石ころだらけだった。昭和20年代、大学リーグ1部だった東大サッカー部はここで練習した。転ぶとすぐにヒジやヒザを擦りむいた。深いタックルでもしようなものなら、たいてい太モモを大きく擦りむいた。痛くてなかなか治らぬ傷だった。

何日かのちに、赤チンを塗った傷に大きなカサブタができた。その形と色合いから、みんな「ビフテキ」と呼んだ。学生が本当のビフテキをめったに口にすることのないころの話である。

丘の上の木造の集会所が「山上御殿」と呼ばれていた。御殿下の名前の由来はそこからきていた。1989年東大百周年記念事業として、卒業生から集めた20億円を投じ、グラウンドを掘り起こして、巨大なスポーツセンターに生まれ変わった。

地下には目を見張るような豪華なプールと体育館、トレーニング室ができた。グラウンドも人工芝になり、すっかりたいらになった。丘が半分削られて、山上御殿は、グラウンドと同じ平面のレンガ色のスマートなビルになった。

グラウンドは、いま人気のアメフト部が使うことがあるが、大体は学生や職員がソフトボールを楽しんでいる。学生がプールをゆったりと泳ぐ様子は、まるで町のスポーツジムの雰囲気だ。もはや太モモにビフテキを作ったころの面影はない。

（1995年ころ朝日新聞東京版「街角」のために書いたが、掲載されなかったもの）